

## 一、「木・火・土・金・水」

「木・火・土・金・水」といえば、後代ではまず五行のことであり、各種事物を分類し、相生・相克といった相互関係を考察するための概念である。

しかし、『尚書』や『左伝』といった早期の文献に見える「木・火・土・金・水」は、分類や相互関係を示す概念というよりも、単に民生に供される物資という、極めて具体的な意味で用いられることが多い。このような「木・火・土・金・水」は、『左伝』の記述(1)に因んで「五材的五行」とも呼ばれる。

ただ、『左伝』の中には、「水・火」や「火・金」の相克を示す、やや抽象化された五行概念も登場する。また、一説には、『墨子』に五行全体の相克を念頭にした説が見えるという。これらを如何に考えるべきだろうか。

本節では、「木・火・土・金・水」の五者に関する記述を含む早期の伝世文献を取り上げ、問題を整理する。

### 『尚書』洪範

周の武王が殷を滅ぼした後、殷の遺臣箕子に政治の要諦を訊ねると、箕子は洪範九疇(禹が天より賜ったとされる大法。五行・五事・八政・五紀・皇極・三徳・稽疑・庶徴・五福六極の九項目)を以ってそれに答えたという。『尚書』洪範にはその内容が掲載されており(2)、その第一項目「五行」には、水・火・木・金・土が述べられている。

五行。一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰從革、土曰稼穡。潤下作鹹、炎上作苦、曲直作酸、從革作辛、稼穡作甘。

五行。第一に水、第二に火、第三に木、第四に金、第五に土。水は潤い下り、火は燃え上がり、木は曲げられたり伸ばされたりし、金は変形させられ、土は実りを生む。潤い下るのは塩味をなし、燃え上がるのは苦味をなし、曲げられたり伸ばされたりするのは酸味をなし、変形させられるのは辛味をなし、実りを生むのは甘味をなす。

これは、「五行」として「木・火・土・金・水」の全てを挙げる初期の例であり(3)、後世の五行説では、この記述を元にして様々な言説が展開される。しかし、陳其元が述べているように(4)、ここでの「五行」は元々はそれほど抽象的な概念ではなく、具体的な物質とその性質・味を述べるのみだったと考える方が良いだろう。少なくとも、ここに分類概念としての意味は見出せず、また相生・相克の記述も無い。

後世にしばしば問題となるのが、この洪範で列挙される五行の順序である。相生の順であれば「木・火・土・金・水」、相克の順であれば「土・木・金・火・水」である。しかし、洪範における五行の順序は、そのいずれでもない。おそらく、相生・相克の観念と無関係であったためであろう。

洪範五行の水(一)・火(二)・木(三)・金(四)・土(五)という順序・数字は、後に五行の「生数」として説明され、それぞれに五を加えた水(六)・火(七)・木(八)・金(九)・土(十)は五行の「成数」として用いられるようになる(5)。特に成数は時令で用いられ(6)、更には始皇帝が水徳を自称した際には様々な制度を「六」によって定めたという(7)。

しかし、当初からそのような術数的な理論に基づいて構想されたかは疑問で、少なくとも洪範篇の文言のみからそれを読み取るのは不可能である(8)。

むしろ『尚書大伝』が述べるように(9)、「水・火」を飲食に必要な物、「木・金」を工作・建築に必要な物、「土」を万物を生み出す物と分類できる。あるいは、「水・火」「木・金」「土」を、順に「生存上、常に必要とされる基本物資」・「不足してもすぐには生存に関わらない物資」・「間接的には不可欠だが、直接用いることは少ない物資」と考え、緊急性・必要性の順に並べられていると解釈することも可能かもしれない(10)。ともあれ、少なくとも、この順序に深遠な術数的意味を見出されるのは、後世の解釈や他の文献に於いてであり、洪範自体にそれを求めることは難しいだろう。

### 『左伝』文公七年・昭公二十九年

上古の五行説の形成を研究する上で、『左伝』はよく用いられる基本資料であるが(11)、「木・火・土・金・水」の五者全てを含む記述は、実はそれほど多くない。管見の限りでは、文公七年と昭公二十九年の二例のみである。以下、順にそれを引く。

夏書曰、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、勿使壞。九功之德、皆可歌也、謂之九歌。六府三事、謂之九功。水火金木土穀、謂之六府。正徳利用厚生、謂之三事。

夏書に、「美を以つて戒め、罰を以つて正し、九歌を以つて薦めよ。これらを損ねてはならぬ」と申します(12)。「九歌」とは、九功の徳を歌つて称えることです。「九功」とは、六府・三事のことです。「六府」とは、水・火・金・木・土・穀のことで、「三事」とは、正徳(徳を正す)・利用(事物を活用する)・厚生(人々を豊かにすること)のことです(13)。

夫物物有其官、官脩其方……(中略)……故有五行之官、是謂五官。實列受氏姓、封爲上公、祀爲貴神、社稷五祀、是尊是奉。木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土。

それぞれの物には官が設置され、その官がそれに関する技術を修めまします。彼らは列せられて氏姓を授かり、上公に封爵されました。そして、貴神として祭られることとなり、社稷の五祀が彼らを尊奉しております。木正を句芒と言ひ、火正を祝融と言ひ、金正を蓐收と言ひ、水正を玄冥と言ひ、土正を后土と言ひます。

文公七年の文では、水・火・金・木・土の五者のみならず、穀を加えて「六府」と言う。水・火・金・木・土をひとまとまりの五行としていないことから、この五者に何か術数的に特別な意味を見出さず、単に、六種の民生に必要な物資のうちの五種、という程度の認識であると考えられる。

一方、昭公二十九年の文は、木正・火正・金正・水正・土正を「五行之官」と呼び(13)、木・火・金・水・土を「五行」と認識していることが明らかである。

なお、ここで五行の官の祭祀について述べていることを、池田末利氏は「生活に必須な物質の神格化・祭祀化」としている(14)。ただ、実際にそのような「神格化・祭祀化」が当時行われていて、『左伝』の文がそれを改変しながら反映しているのかもしれないが、しかしこの字句を字面通りに読み取りでは、句芒や祝融は木そのものや火そのものではなく、それを司る官名に過ぎない。従つて、五行の神格化の明証とはしがたい。以下、『左伝』昭公二十九年の続きである。

少皞氏有四叔、曰重、曰該、曰脩、曰熙、實能金木及水。使重爲句芒、該爲蓐收、脩及熙爲玄冥。世不失職、遂濟窮桑、此其三祀也。顓頊氏有子、曰犂、爲祝融。共工氏有子、曰句龍、爲后土。此其二祀也。后土爲社。稷、田正也。有烈山氏之子、曰柱、爲稷。自夏以上祀之。周弃亦爲稷、自商以來祀之。

少皞氏に、重・該・脩・熙という四人の子孫がおり(15)、金・木・水によく通じていました。そこで重を句芒とし、該を蓐收とし、脩と熙を玄冥としました。彼らは代々その役目を果たし、少皞氏の成功を助けました。これが、社稷五祀のうちの三祀でございます。顓頊氏に犂という子があり、祝融に任じられました。共工氏に句龍という子があり、后土に任じられました。これが、二祀でございます。后土が、社です。稷とは、田正(田を司る官の長)のことです。烈山氏に柱という子があり、稷に任じられました。夏以降は彼を祀りました。周の弃もまた稷となったので、商以降は彼を祀りました。

ここでは、社稷に祭られているのが、上古に職責を果たした人々であることが述べられている(16)。

そもそもここで引いた文言は、晋の大夫蔡墨が、龍が生きたまま得られなくなったことについて説明した言葉である。蔡墨によれば、上古に於いては龍を飼うことができていたが、後世に「水官弁矣、故龍不生得(水官が廃れたために、龍が生きたまま得られなくなった)」と言うことである(蔡墨は龍を水棲生物と考える)。このように、木・火・金・水・土を修める官の重要性と、それが現在不十分であることを述べるのが趣旨であって、木・火・

金・水・土自体は依然として具体的な物質に留まっている。

なお、興味深いのは、「五行之官」「社稷五祀」としておきながら、木正・火正・金正・水正・土正の他に田正を挙げることである。文公七年で水・火・金・木・土に穀を加えて六府としてのことと、ここで木・火・金・水・土に田を加えた六者を社稷に祀る対象としていることは、やや似ている。穀も田も、穀物の栽培・収穫に関係する。これらの言説が作られた当時において、「五」という枠はそれほど強固ではなく、食糧に関係する穀や田を加えて六種とすることに抵抗は無かったのかもしれない。

### 『左伝』昭公九年・昭公十七年・昭公三十一年・哀公九年

これまで検討したのは、いずれも五種の物質を列挙するのみの文章で、五行間の相互関係については一切言及が無かった。しかし、『左伝』の昭公九年・昭公十七年では、それぞれ「火、水妃也」「水、火之牡也」という、水火間の関係について述べられている。

夏四月、陳災。鄭裨竈曰、五年、陳將復封。封五十二年、而遂亡。子産問其故。對曰、陳、水屬也。火、水妃也、而楚所相也。今火出而火陳、逐楚而建陳也。妃以五成。故曰五年。

夏四月、陳で火災が起こった。鄭の裨竈が、「五年後に陳が諸侯として復帰するでしょう。復帰してから五十二年後に、滅亡してしまうでしょう」と述べた。子産がその理由を訊ねると、次のように答えた。「陳は水に類します。火は水の妃であり、また、楚が治めるものです。この度、火(17)が現れて陳に火災が起こったのは、楚を追い出して陳を再建するということなのです。そして、妃とは、五によって成就するものです。だ

から『五年』と言ったのです」

冬、有星孛于大辰西、及漢……(中略)……梓慎曰、往年吾見之、是其徵也。火出而見。今兹火出而章、必火入而伏。其居火也久矣……(中略)……若火作、其四國當之、在宋衛陳鄭乎。宋、大辰之虛也。陳、大皞之虛也。鄭、祝融之虛也。皆火房也。星孛天漢。漢、水祥也。衛、顓頊之虛也、故爲帝丘。其星爲大水、水、火之牡也。其以丙子若壬午作乎。水火所以合也。

冬、彗星が大辰(18)の西方に現れ、東方の天の川にまで到った……(中略)……梓慎が次のように述べた。「昨年と同じ現象を観測しました。今回のことの前触れだったのです。つまり、火が出て来て彗星が現れたのです。今年火が出ると彗星がはつきりと見えました。火が没してから彗星も姿を消すでしょう。彗星が長い間、火に付き従っているのです……(中略)……もし火災が起これば、四ヶ国、つまり宋・衛・陳・鄭に於いてでしょう。宋は大辰の分野に当たり(19)、陳は大皞の、鄭は祝融の跡地であり、いずれも火の宿るところです。彗星が天の川に到ったことについては、次のように考えられます。天の川は、水の象徴です。衛は、顓頊の跡地であり、そのために帝丘と称せられます。衛に当たる星は大水(20)であり、水は火の牡です。そこで丙子もしくは壬午の日に火災が起これるでしょう。水火が合わさるためでございます」

前者では陳を水、楚を火に配当し、火が水の「妃」であると述べる。後者は、天文の大辰を火、天の川・大水を水に配当し、諸侯の宋・陳・鄭を火、衛を水に配当する。更には丙・午を火、壬・子を水に配当した上で、これら

を関連付けて彗星を解釈している。それぞれ陳についての配当は異なるが、水が火の「牡」であり、火が水の「妃」であるという説は整合する。また、火・水を具体的な物質ではなく、天体や日付・国名の属性を示し、それらを関連付ける抽象的な概念として用いていることが明らかである。

そして、昭公三十一年・哀公九年では、「火勝金」「水勝火」といった、明確に相克を示す文言が見られる。

十二月辛亥朔、日有食之。是夜也、趙簡子夢童子羸而轉以歌。

旦占諸史墨曰、吾夢如是、今而日食、何也。對曰、六年及此月也、吳其入郢乎、終亦弗克。入郢必以庚辰。日月在辰尾、庚午之日、日始有謫、火勝金、故弗克。

十二月辛亥の朔日、日蝕が起こった。この夜、趙簡子が、童子が裸で転がりながら歌う、という夢を見た。朝になってこれについて、史墨に「このような夢を見た。そして今、日蝕が起こった。これはどういうことなのか」と訊ねた。史墨は、次のように答えた。「六年目のこの月に、呉が郢に入城するでしょう。ただ、結局は勝ち切らないでしょう。郢への入城は、きっと庚辰の日でしょう。この度、日・月がいずれも辰の尾(21)に在り、庚午の日に、太陽に異変が生じ始めたからです。また、火は金に勝つので、(呉は楚に)勝ち切らないのです」

晉趙鞅卜救鄭、遇水適火、占諸史趙史墨史龜。史龜曰、是謂沈陽、可以興兵、利以伐姜、不利子商。伐齊則可、敵宋不吉。史墨曰、盈、水名也。子、水位也。名位敵、不可干也。炎帝爲火師、姜姓其後也。水勝火、伐姜則可。

晉の趙鞅が、鄭を救援することについて占ったところ、「水が火に適く

という結果を得た。そこで、これについて史趙・史墨・史亀に訊ねた。史亀は、次のように答えた。「これは『沈陽』というものです。戦争をしかけても良く、姜姓を伐つには良いが子商を伐つには良くありません。つまり、斉を伐つことはできませんが、宋を敵にするのはよろしくありません」また、史墨は、次のように答えた。『盈』というのは、水に關する名です(22)。そして、『子』は水の位です(23)。名と位とが拮抗しているのです、伐つことにはなりません。一方、炎帝は火師であり(24)、姜姓はその後裔です。水は火に勝つので、姜を伐つのは問題(25)ございません」

前者は庚を金、午を火とし、「火勝金」という言葉を口にしてしている。後者は「盈(贏)」「子」を水に当て、炎帝とその子孫を火に当て、それらの間に「水勝火」という関係を説く。明確に、相克の關係が述べられている。

以上の通り、『左伝』には、十干・十二支や諸侯を「水」「火」「金」に配当し、それらの間に「妃」「勝」といった關係を見出す言説が見られる。ただし、これを以て、後世の所謂「五行相勝」が完備していたと判断することは控えたい。何故なら、これらの言説には「木」「土」が登場しないからである。例えば、十二支の子・午がそれぞれ水・火に対応することは明らかだが、丑・辰・未・戌が後世のように土に配当されるかは不明である。また、五行に加えて「穀」が想定されていたかもしれない。それに、水が火を消す、火が金を燦かすというのは、相勝關係として理解しやすい事柄だが、木が土に勝つ、金が木に勝つといった事柄は、すぐに思いつく關係ではない。これらが見えない以上、五行相勝が完備していたとは判断しがたい。そこで、ここでは、少なくとも水火や火金の間に相勝という言葉があった、と述べるに留めたい。

### 『墨子』經下・經説下

『墨子』經下・經説下には、五行の相勝についての文言ではないかと言われている一節がある(25)。ここでは、この文言について考察する。以下は、『墨子』經下の文である。

五行毋常勝、説在宜。

五行の間で必ず勝つものは無い。その理由は「宜」(26)ということにある。

そして、それに対する解説と見なされる經説下の文言は、次の通りである(句読に諸説ある箇所には、句読を打たない)。

五合水土火火離然火鑠金、火多也。金靡炭、金多也。合之府水、木離木若識麋與魚之數惟所利(27)。

かつて梁啓超氏が『墨子』は先秦諸子の中で、最も読みにくい(28)、  
「古書の中で最も読みにくく、最も興味深いのは、『墨子』の經上・經下・經説上・經説下・大取・小取の六編である」(29)と述べていたように、この經説下の文も非常に難解で、解釈が分かれる。

まず、孫詒讓『墨子間詁』による解釈に従って訳出すると、以下のようになる。

五合(五行が合うこと)。木は火を生む(30)。火は(木に)着いて燃える。火が金を熔かすのは、火が多いからである。金が炭を削るのは、金が多いからである。両者を合わせると水になる(31)。木は土に着く(32)。

オオジカや魚がいずれも利益のあるものへ向かうのみで、愛憎の無いこと(33)を知るようなものである。

一応は筋が通るが、いくつかの字を意によって改めている。

譚戒甫『墨辯發微』(34)は、更に多くの字を改め、次のように解釈する。

五(「五行母常勝」の経文について)。金・水・土・木・火・離(35)。

そして火が金を熔かすのは、火が多いからである。金が炭を費やし尽くすのは、金が多いからである。金が集め(36)、火が木にくるのは(37)、オオジカや魚の性質が、それぞれ利とする森や川へ行くことを認めるようなものである。

また、高亨『墨經校註』(38)は、次のように解する。

五(「五行母常勝」の経文について)。金・水・土・火・木(39)。燃える

火が金を熔かすのは、火が多いからである。金が炭火を消すのは、金が多いからである。金は水に付着し(40)、火は木に着いて燃える(41)。

また、オオジカと魚の性質も、利とするところに着く(42)。

その他にも様々な訳・注があるが、それぞれ異なる解釈を行っており、定説は無い。しかし、「火鑠金、火多也。金靡炭、金多也」の部分については、概ね一致している。すなわち、火が多ければ火が金を熔かし、金が多ければ金が炭(もしくは炭火)を消滅させると解釈する。そして、これが経文の「五行母常勝」を説明していると考えるのである(43)。

仮に「火鑠金、火多也。金靡炭、金多也」が「五行母常勝」を説明しているとするならば、この「五行母常勝」は、『左伝』昭公三十一年の「火勝金」や哀公九年「水勝火」といった言説とは内容が異なる。五行の間に必ずしも一方的な勝敗の法則が規定されるのではなく、それぞれ場合によって結末が異なるということになるからである(44)。

一説には、『墨子』のこれらの文章は、当時流行していた五行相勝説への反論であり、裏を返せば、当時すでに五行相勝説があったことの証明になるという(45)。しかし、『墨子』経説下が確実に述べているのは、金・火の間の関係であって、その他の部分については不明瞭な点が多い。『左伝』昭公三十一年・哀公九年の場合と同じく、五行全ての間における相勝関係が明確に規定されていた明証とはしがたい(46)。

以上の考察により、早期に成立したと考えられる伝世文獻に見える「五行」や「木・火・土・金・水」については、次のことが言える。

・五行(木・火・土・金・水)は、基本的には、生活に必要な五種類の物資を指すと考えられる。ただし、『左伝』には、国や干支を五行に当てはめる言説も見える。つまり、どの程度体系化されていたかは不明ながら、抽象的な分類名を示す場合もあった。

・「穀」や「田」を加えて、六者で一組となることもあった。従って、木・火・土等々が挙げられていても、必ずしも五者一組とは限らない。

・火と水や、金と火との間に、それぞれ勝敗の関係が説かれる例があるが、五通りの完備した五行相勝関係が想定されていたとは限らない。

これらを概観するに、「五行」とそれを構成する「木・火・土・金・水」の五者、それに国や干支を当てはめる発想、そして少なくとも一部の間における相勝関係といった、五行説の素材となるものはほとんど揃っている。ただ、体系性を持つ抽象的な五行説が既に発達していたと見なすには、明らかに根拠が足りない。

『左伝』や『墨子』経・経説が成立したと考えられる前四世紀頃に、こういった五行説の素材（もしくは断片）が存在し、それが前三世紀以後の五行説の体系的な整備・流行につながって行ったと考えるのが、無難ではなからうか。